



えぐさ かな
【千葉日報社長賞】 江種 佳奈

おじいちゃん、おばあちゃんごめんなさい。

私は二人が亡くなる最期の瞬間に病室に行くことができませんでした。
あんなに優しくしてくれて、いろんな場所に連れていってくれて、
可愛がってくれたのに、ごめんなさい。

あんなに元気だったのに、別人みたいに痩せて弱気になっていく姿を見るのが辛かった。

なんてただの言い訳で、本当は死の瞬間に立ち会うのが怖くて、
二度と口もきけない、会えない、形すら焼かれて無くなってしまうという現実を
受け入れられなくて、逃げ出しました。

母から、最期まで私の伝言に「うん、うん」って
頷いてくれていたって聞いたとき、なんて不幸なことをしたんだって思いました。

おじいちゃん、おばあちゃん、会いに行くたびにいろんな物を買ってくれたり、
食べさせてくれたよね。

でも本当は一緒にいるだけで幸せだったんだ。

それにもっと早く気づいて、伝えられればよかった。

物じゃなくて、もっとよく顔を見て、いろんな話をして、笑って、触って、
声を耳に焼きつけていればよかった。

「この本に出てくる村人のような優しい人に成長してね。」


贈ってくれた本の当て紙にメッセージを書いてくれたよね。

その言葉が、約束が、

おじいちゃんとおばあちゃんに果たせなくてごめんなさい。

この言葉が、こんなに勇気と覚悟が必要だったなんて、思ってなかった。

でも、命を懸けてそれを教えてくれたことを忘れず、
私も命と人生を懸けて今度こそ約束を果たすからね。



(広島県／21歳／大学生)